



巻頭言

「心を感じ、声を聴く」

日本学校教育相談学会宮城県支部
副理事長 神田裕樹

会報「きずな」第17号の発刊おめでとうございます。発刊に当たり労をお取りくださった広報委員会の皆様をはじめ、寄稿してくださった会員の皆様に心から感謝申し上げます。

平成15年の支部設立から20年という節目の年ではありますが、新型コロナウイルス感染症は流行の波を繰り返しています。コロナ禍の中で会の活動が制限される中でも、令和4年度は宮城県支部学校カウンセラー部会や宮城学院女子大学教授梅田真理先生を講師に宮城支部研修会を実施することができました。会場に参集して、あるいは、オンラインで参加していただきました皆様に、そして、会場の参加者とオンラインでの参加者の両方に対応していただいた事務局の皆様に変更して感謝申し上げます。

さて、私には以前から気になっていることがあります。それは、毎年行われています宮城県児童生徒学習意識調査のことです。これは小学校5年生と中学1年生に実施しているもので、生活や学習に関することを児童生徒と学校（先生）の両方に問うものですが、同じ内容の質問に対する回答が「かい離」している状況が見られます。例えば、◇「先生から声を掛けられたり、励まされたりしていますか。」という問いに小学5年の78.5%が肯定的な回答をしているのに対して●「児童生徒一人一人に、積極的に声を掛け、励ましていますか。」の問いに学校は99.2%が肯定的な回答をしています。学校（先生）はほぼ全員が「声を掛けていますよ、励ましているよ」と答えているのにそう受け止めていない子供が一定数いるということです。◇「先生はあなたの良いところを認めてくれますか。」や◇「授業の振り返りを行っていますか」といった質問に対しても子供たちと学校（先生）には同様のかい離が見られます。逆に子供たちができていると答えているのに学校（先生）はできていないと回答しているものもあります。◇「友達の話や意見を最後まで聞いていますか」という問いに対して、子供たちは最後まで話を聞いていると答えているのに一定数の学校（先生）は聞くことができていないと答えています。

子供たちと学校（先生）の受け止め方に少しの差ができるのは仕方がないことかもしれません。しかし、差があるということを感じていること、差を埋めるために耳を傾ける努力をすることは必要だと思います。今後も本会の会員の皆様の活動が子供たちの「心を感じ」、子供たちの「声を聴く」ことに繋がっていくことを願っています。

WITH コロナが言われ、学校行事も感染防止を行った上で実施することが多くなり学校本来の活動が戻りつつあります。今後の本会の活動の充実と会員の皆様が健康に留意されご活躍くださいますことを祈念し巻頭の言葉といたします。

各委員会より



研修委員会

委員長 神田 裕樹

まず初めに、今年度もコロナ禍の中で研修委員会としての活動が滞ってしまったことをお詫びいたします。このような中ではありますが、事務局の方々のご配慮により支部研究・事例発表会並びに第48回研修会・第49回研修会を以下のように行うことができました。

終息はしていないものの様々な活動がコロナ禍以前に戻りつつあります。次年度の研修内容については現場で役立つものをとという意見が理事会におきましても出されました。遠隔地でも参加ができるオンラインのよさと対面でのよさを生かしながら、これからも会員の皆様と学んでいきたいと思っております。

- 令和4年度支部研究・事例発表会（ZOOMによるオンラインで実施）

期 日：令和4年8月20日（土）10：00～12：00

内容等：高橋 錬先生（白石市立白石中学校教諭）

「公立中学校におけるMLAを意識した取組」

藤阪 雄一先生（石巻市立大谷地小学校教諭）

「教育活動において教員が感じる困難と教員へのサポート体制に関する研究報告

～東日本大震災に関わる調査研究より～」

- 第48回研修会（ZOOMによるオンラインで実施）

期 日：令和4年8月20日（土）13：30～16：30

内容等：中村 恵子先生（東北福祉大学総合福祉学部心理学科准教授）

「別室登校法とチーム支援の機能分析」

- 第49回研修会兼令和4年度北海道・東北ブロック研修会（対面とオンラインで実施）

期 日：令和4年11月26日（土）13：30～16：30

会 場：東北福祉大学国見キャンパス2号館

内容等：梅田真理先生（宮城学院女子大学 教育学部 教育学科教授）

「発達障害のある子どもの理解と支援～アセスメントを支援に生かす～



広報委員会

委員長 千葉 久美子

広報委員の皆様のご尽力により、会報「きずな」を発行しており、このたび17号の「きずな」をお手元にお届けすることができました。この第17号は大河原ブロックの高橋 錬先生を中心に、大河原ブロックの素晴らしいチームワークの結晶の紙面になりました。大河原ブロックの皆様に衷心より感謝申し上げます。

この会報はタイトルのとおり、会員相互のきずなをより深め、研修や情報交換の場になれるよう広報委員会が心を合わせて、魅力ある紙面を作っていきたいと思っております。また、公私ともにご多忙の中、快く原稿をお引き受けいただきました会員の皆様に改めて御礼申し上げます。なお、17号以降の担当は以下ようになります

◇第18号・担当：大崎ブロック

◇第19号・担当：石巻ブロック

◇第20号・担当：仙台ブロック

◇第21号・担当：大河原ブロック

◇ コラム・紹介図書への投稿のお願い

会員のみなさまのコラム欄「つぶやき」を広く募集しています。日頃悩んでいること、日常の心を動かされたできごと、体験談、本の紹介、誌上発表などなど。縁があって仲間になった私たちです。この欄を通して、ネットワークを作り、情報を交換し、よりよい教育相談を目指していきたいとものです。会報「きずな」が学会のネットワークづくりの一助になり、本当の意味での「絆」になることを念じて。

紀要作成委員会

委員長 中里 和裕

紀要作成委員会の仕事は、研究紀要「ふれあい」の作成です。しかし、実は平成21年度(2009年度)の記録をまとめた第7号の発刊以降、平成23年(2011年)3月11日に発災した東日本大震災により第8号の編集作業が中断し、その後は「震災後の教育相談活動の記録」や、「支部活動10周年記念」等の企画を立てながら、発刊に向けた努力がなされていたにも関わらず、様々な理由から十分な活動が行えず、発刊に至らない状況が続いていました。

そのため、今年度は紀要作成委員会ではなく事務局が中心となって、まずは体裁や内容にこだわらず、とにかく紀要発刊を再開することを目標に作業を進めることになりました。そして、先日ついに12年振りの発刊となる「ふれあい」第8号を会員の皆様にお届けすることが出来ました。内容は既にご覧いただいていることと思いますが、令和元年8月9日～11日に開催された全国大会の記録をはじめ、発刊が休止されていた12年間の宮城県支部の研究や活動の軌跡を可能な限り収録し、掲載しています。

この度の紀要発刊に際し、原稿をご執筆いただきました支部会員の皆様、資料の掲載をご快諾いただきました支部研修会講師の皆様、そして、発刊に向けてご尽力いただきました、事務局長の高橋豊先生、事務局次長の熊谷みち先生、西川洋平先生、事務局会計で、紀要の表紙・中表紙のイラストも描いていただきました齋藤由布先生、そして常に作業を見守り、ご指導ご助言を賜りました支部理事長の渡辺美貴先生に、紀要作成委員会を代表して心より厚く感謝と御礼を申し上げます。



各地区ブロックより

◇◇◇大河原ブロック◇◇◇

大河原ブロック幹事 高橋 錬

大河原ブロックの幹事を担当させていただいております。顔が分からないと活発な交流ができないと考え、ブロック会員の顔合わせを兼ねた研修会を企画していましたが、実施に至りませんでした。次年度こそ実施したいと強く思います。

私事になりますが、中学校に勤務しています。いわゆる中堅と呼ばれる年齢になり、若い教員から相談を受けることが増えました。学校現場では、一人一人の子どもに応じたオーダーメイドの対応が求められるようになってきました。うまくいくことばかりではなく、指導や対応の在り方にこのやり方でいいのか自問自答したり悩んだりしている教員は多くいます。私自身もその一人です。

校種や職種を問わずにそうした悩みを共有し、解決の糸口を探ることが学校現場を支えることになると思います。悩みを打ち明けること自体にも意味があります。明日への活力が生まれる研修会を考えていきますので、お力添えをお願いします。

◇◇◇仙台ブロック◇◇◇

仙台ブロック幹事 村上 誠

今年度、仙台ブロックの幹事を担当させていただきましたが、終息が見えないコロナ禍においてブロック研修会を開催することができませんでした。大変申し訳ございませんでした。

以前、仙南地域に勤務していた際に所属していた大河原ブロックの研修会においては、それぞれの先生方が直面している児童生徒の教育相談に関わる課題とその解決のための取組についての発表を拝聴し、勤務校での取組に生かしてきました。このときから変わることなく私の心にあることは、地域の児童生徒の教育活動に取り組む先生方の志には校種の別はないということであり、今も一人ひとりの生徒に先生方を重ねながら日々の教育活動に取り組んでいます。

そのような中で高校の現場においては、「発達障害が疑われる生徒の学校不適合」「家庭環境に起因する不登校」とともに「新型コロナウイルス感染症予防による出席停止の陰に隠れた不登校」が増加しているように見受けられます。このコロナ禍の3年間においては、生徒の大切な活動・活躍の機会とともに前述したような生徒に手を差し伸べる教育相談の機会までもが失われたように感じています。

春からは新型コロナウイルス感染症予防のための制限も大きく緩和されることになると思います。次年度はブロック研修会等をとおして小・中・高のそれぞれの現場での取組を一本につなぐことができるように計画していきたいと思います。今後も微力ながら努めて参りますので、何卒お力添えをよろしくお願いいたします。

◇◇◇大崎ブロック◇◇◇

大崎ブロック幹事 高橋 聡子

大崎ブロックでは、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、主な活動は行いませんでしたので、オンラインで開催される県支部研修会に大崎ブロックの方々が積極的に参加いたしました。また、理事会等のMEETによる話し合いに参加した方に感想を聞くと、「長い間、近況報告もできなかったが、画面を通して拝見する会員の皆様に安心した」と伺い、対面での研修会を待ち望んでいるようでした。

令和5年度も、石川健先生を中心に、感染状況を見極めながら少しずつ対面で元の活動ができるようにと考えております。4月には、「ブロックの理事会・研修会」を対面で予定しております。

◇◇◇石巻ブロック◇◇◇

石巻ブロック幹事 藤坂 雄一

石巻ブロックにおいても、コロナ禍のために今年度もなかなか集まることはできませんでした。しかしながら、学校教育相談のニーズは高まっており、学校現場では多くのケース会議が開催されていると耳にします。チームでの対応をより効果的なものにするためには、構成メンバーの専門性を高めることが必須です。アセスメントする力、居心地のよい教室風土を醸成するマネジメント力、ピア・サポートを促進させるコーディネート力、そして日々の学びをデザインする力など教職員が求められる専門的力はあまりにも多く、現状の多忙のなかで学ぶことはかなりのエネルギーを要することでしょう。

だからこそ、共に学ぶことの価値を感じます。協働による学びを児童生徒に求めている私たちこそ、一緒に学ぶよさを積み重ねていくようにしたいものです。

さて、私事ではありますが、教育相談学会のご縁で、1月に慶應義塾大学で講師をさせていただきました。震災と学校教育というテーマでした。現役の学生や院生のほかに留学生や附属中・高の先生方、また被災して関東に移り住んだという方など、講義の後も同じぐらいの時間、質問に対応しました。翌日は、付属女子高校の学生さんと、毎年開催している東日本大震災をテーマにしたイベントでの発表に向けてのインタビューがありました。こうして被災地に思いを寄せていただいていること、また防災教育を“自分事”として考えている方々がいらっしゃることに私は驚きました。そして、被災地で教育に携わる私たちは何をなすべきか、何ができるのかを考える日々です。

令和4年度支部研修報告



●令和4年度日本学校教育相談学会宮城県支部第48回研修会報告

「演題 別室登校法とチーム支援の機能分析」(講師：東北福祉大学 中村恵子准教授)

宮城県立石巻支援学校 高橋 憂季実

別室登校の子どもたちとの関わりの中で、登校回数や他の子どもたちとの関わりが多くなると、教師側は「そろそろ学級復帰できるのではないかな...」という思いが、少なからず生まれてくるのではないのでしょうか。

第48回支部研修会では、東北福祉大学 中村恵子准教授から「別室登校法とチーム支援の機能分析」と題して講義をしていただき、別室から教室への再登校支援モデル、チーム支援の機能分析モデル、別室登校に対するチーム支援のアセスメント方法を教えていただきました。別室登校に対するチーム支援プロセス・モデルでは、「子どもの適応支援を目標としているが、教師側は学級復帰だけを目標としてしまうことが多い。」という言葉が印象的でした。子どもたちの不登校のきっかけはそれぞれであり、学級復帰のペースも一人一人異なります。しっかりと子どものアセスメントを行い、支援チームを形成し、組織的に別室登校の子どもたちを支援していくことが大切であると感じました。改めて、どの子どもたちにとっても、笑顔で、安心して過ごせる環境づくりを目指していきたいと思いました。

●令和4年度日本学校教育相談学会宮城県支部第49回研修会報告

「演題 発達障害のある子どもの理解と支援～アセスメントを支援に活かす～」

(講師：宮城学院女子大学 梅田真理教授)

塩竈市立玉川小学校 佐藤 志帆

令和4年11月26日、東北福祉大において、宮城学院女子大学教育学部教育学科教授、梅田真理先生をお招きし、「発達障害のある子どもの理解と支援～アセスメントを支援に活かす～」と題して研修会が行われました。

梅田先生は、研修の最初に「0 一人一人に応じた支援」「1 子どもの『困り』に気づく」「2 発達障害のある子どもたち」「3 通常の学級での支援」という研修予定を示してくださいました。このことによって研修の見通しが立ち、勤務校の事例などと結び付けながら考えることができました。障害の有無を問わず、誰にとっても有効に必要な支援について実感することができました。

子どもの「困り」に気づくためには、「なまけ」や「わがまま」と見えてしまう姿は子どもが困っている姿と捉え、その背景を様々な角度から見ていくことが大切であることを学びました。また、様々な発達障害についての困り感を簡単な演習を通して気付くことができ、どんな支援が必要かを考える思考の流れを学ぶことができました。

できないことに目を向けるのではなく、一人一人の特性を見極め、得意なことを生かし、力を発揮できるような環境づくりが最大の支援になることを改めて理解することができました。また、保護者や専門機関などと連携し、協力し合いながら支援していくことの大切さも確認できました。勤務校の先生方にも本研修で学んだことを共有し実践につなげていきたいと思ひます。



「初心に立ち返って」

白石市立大平小学校 坂本 謙

これまでの教員人生を振り返ると、若い頃、思いが先立ち、問題行動のある子に対して相手の思いを十分に受け止め切れないまま指導に当たっていました。

近年は、特にコロナ禍などで児童生徒が置かれている環境が激変し、深刻な悩みを抱えているケースが見られます。現代の問題は多様で複雑化し、これまでどおりの教師の「経験」「勘」「根性」、いわゆる3Kでは乗り越えられなくなってきました。その中で、解決の糸口となるのはやはり教育相談であろうと考えます。相手の話を傾聴し、寄り添って問題を考える基本的な姿勢が、今の時代により一層求められているように思います。

「少にして学べば則ち壯にして為すことあり、壯にして学べば則ち老いて衰えず、老いて学べば則ち死して朽ちず」(佐藤一斎)

人生、学ぶことにおいては遅きに失することはなく、今回会員になったことを機に、学校現場に少しでも寄与できるように初心に立ち返って多くのことを学んでいく所存です。

事務局より



1 令和4年度の宮城県支部の活動報告

1 支部第20回総会

令和4年5月8日(日) 13:30～(会場:オンライン開催)

2 役員会

(定例会)

○ 第1回理事会

令和4年4月29日(金) 13:30～(会場:オンライン開催)

○ 学校カウンセラー宮城県支部推薦委員会

令和4年11月12日(土) 14:00～(会場:東北福祉大学国見キャンパス)

○ 第2回理事会

令和5年2月25日(土) 13:00～(会場:東北福祉大学国見キャンパス)

3 事務局

○ 令和4年度会員名簿発行

4 各専門委員会

I 各専門委員会打合せ 令和4年5月8日(土) 総会終了後(会場:オンライン開催)

II 各専門委員会活動

○ 研修委員会

① 第48回研修会(令和4年8月20日(土) 13:30～(会場:オンライン開催))

② 第49回研修会(令和4年11月26日(土) 13:30～(会場:東北福祉大学国見キャンパス))

③ 研究発表会(令和4年8月20日(土) 10:00～(会場:オンライン開催))

- 広報委員会
 - ・ 支部会報17号の発行（大河原ブロック）
 - ・ 支部会報18号の発行準備（大崎ブロック）
- 紀要作成委員会
 - ・ 紀要第8号の発行（令和5年3月）※事務局が担当し12年ぶりに発行

5 各ブロック（新型コロナウイルスの感染防止のため活動休止）

6 学校カウンセラー部会

- 第6回総会・研修会の開催（令和4年10月29日（土）13：30～（会場：東北福祉大学 国見キャンパス））

2 日本学校教育相談学会宮城県支部第48回・49回（兼令和4年度北海道・東北ブロック）研修会

1 第48回研修会

- 期 日 令和4年8月20日（土）13：30～
- 会 場 ZOOMを使ったオンラインでの開催
- 内 容 「別室登校法とチーム支援の機能分析」
- 講 師 中村 恵子 先生（東北福祉大学 総合福祉学部 福祉心理学科 准教授）

2 第49回研修会（兼令和4年度北海道・東北ブロック研修会）

- 期 日 令和4年11月26日（土）13：30～
- 会 場 東北福祉大学国見キャンパス
- 内 容 「発達障害のある子どもの理解と支援～アセスメントを支援に活かす～」
- 講 師 梅田 真理 先生（宮城学院女子大学 教育学部 教育学科 教授）
- ※ ハイブリッド（集合型&オンライン）で開催

3 日本学校教育相談学会宮城県支部令和4年度研究・事例発表会

- 期 日 令和4年8月20日（土）10：00～
- 会 場 ZOOMを使ったオンラインでの開催
- 内 容
 - ① 高橋 錬先生（白石市立白石中学校教諭）
「公立中学校におけるMLAを意識した取組」
 - ② 藤坂 雄一先生（石巻市立大谷地小学校教諭）
「教育活動において教員が感じる困難と教員へのサポート体制に関する研究報告
～東日本大震災に関わる調査研究より～」

<編集後記>

お忙しいところ、原稿の執筆をお引き受けいただいた方々に感謝申し上げます。編集担当として十分なサポートができず、申し訳ありませんでした。

普段何気なく読んでいた広報きずなでしたが、編集を担当してみると、何気なく読んでいたことに申し訳なさを感じました。これからは執筆された方々が文章に込めた思いや願いを考えながら読みます。

対面での活動が徐々に緩和されています。以前のように会員の皆様と直接お会いし、共に学ぶことを楽しみにしております。

大河原ブロック 高橋 錬

